

キルケゴールは自分のために読め—そしてキルケゴールと対話をせよ

人文学の社会的意義とは

私が大学院修士・博士課程に在籍した 1980 年代後半の 5 年間、研究上のテーマや内容に関して、指導教授の大谷愛人^{ひろひと}先生から、とくに細かい指導を受けたことはない。また研究について干渉されたこともない。大学院に入った以上は、研究は自分で責任を持つてするものだという気風が当時は強く、私もそのようなものと思っていた。そもそも学問や研究は人に言われてするものではない。その意味で、昨今の大学院での過剰な教育指導というものに、私はいささか疑問を持っている。

私が思い出すのは、大谷先生が論文指導に当たって繰り返し言われた次の助言である。それは、「その論文を書くことによって一番利益を得る者が、それを書いた本人であるような、そういう論文をこそ書くように」というものであった。この助言は、学部時代の倫理学概論のレポートから始まって、卒業論文、修士論文、博士論文を書くたびごとに聞かされた。先生の論文指導は、一言で言えば、この一点に尽きると言っても過言ではない。

今思えば、このアドバイスは、学問研究における自己の実存的な姿勢の大切さを強調したものであることがよく分かる。論文を書くことで、自分の生き方や世の中をより深い視座から見つめ直すべきである。そういう論文こそが、論文執筆者にとって最も有益で価値あるものなのである。

哲学思想、歴史、文学などの人文学の研究の場合、目に見える形で直接的に役立つ場面はあまりない。社会貢献と言っても、書かれた論文や著作を通じての間接的貢献となる場合が多い。そのためには、まず研究者自身にとって一番に役に立つものであることが不可欠となろう。学問、とりわけ人文学に携わることの意義は、自分自身への直接的裨益を通じて、社会への間接的貢献を果たすことにあると言えるのではないだろうか。

現代人がキルケゴールを読み意義とは

上述のことから、21 世紀に生きる我々がキルケゴールを読み、また研究する意義もおのずと見えてくる。キルケゴールはどこまでも 19 世紀前半のデンマークの一思想家であるが、彼自身の実存を賭した真摯な思索と生き方は、時代や民族や文化を超えて単独者 den Enkelte としての我々一人ひとりに大きな実存的振動を与えてくれるものである。どんなに特殊な主題が取り上げられていようとも、彼の深い探究は、人間が人間であるかぎり引き受けるべき普遍的な問題次元へと突き抜けている。その著作活動を通じて最も裨益されていたのは、他ならぬキルケゴール自身であった。だからこそ、人々は洋の東西を問わず、また信仰の有無にかかわらず、自らの実存的関心をもってキルケゴールを読み解き、研究を行い、自分自身の生き方を深めることができたのだ。

ところでキルケゴールの著作は数多く、彼に関する研究書、解説書や個別論文など二次文献も膨大であり（大谷愛人教授にも総頁数 6,300 頁を超えるキルケゴール研究書計 5 冊がある）、文献は汗牛充棟のありさまである。しかし、「自分の得になるには何を読めば良いか」という単純な基準さえ立てるならば、読むべきテキストは決まってくる。先ずキルケゴール自身の著作、彼の書いたテキストそのものに直接当たることが基本中の基本である。優れた訳書が出ているので、日本人であれば日本語

訳されたものでも構わない。いや、日本人であれば日本語の回路を通して理解を深めることこそ求められるのである。そして、そのようにすれば、いわゆるキルケゴール研究者でなくても、キルケゴールを読む側がしっかりした問題関心を持ってテキストに当たるかぎり、相当深く読むことができるのである。なぜならキルケゴール自身が、そのように自らの著作を書いたからである。

村瀬学『新しいキルケゴール』

私自身、数多くのキルケゴール研究書を読んできたつもりである。その少なからぬものが、父ミカエルの秘密、大地震の体験やレギーネ事件の謎は何なのか、著作に隠された真の意図は何か、偽名の背後にある彼の真実の姿とはどんなものなのかを解明しようとしたものだった。それは確かに興味深い学問的な謎解きでもあろう。幾つもの偽名や実名を使い分けて書くという、手の込んだ文学的手法を彼が取っていることによって、読者にそうした謎解きを誘っている節もあるがゆえに、なおさらその手の伝記的事実に関わる研究は盛んである。

しかし、その一方で別の疑念が頭をもたげてくる。ひょっとしたら、謎を解く鍵は伝記的な事柄ではなく、彼の一つひとつの著作の中にこそ隠されているのではないのだろうか。個々の著作を作品論として丁寧に読み解いていくことのほうが、著作に込められた真意をよりよく把握でき、結局はそれこそがキルケゴールという一個の実存を明らかにしてくれるのではないだろうか。

実は、そうした観点から、日本語訳だけに頼りつつも、彼のテキストにまっすぐに向い、作品論を通じてキルケゴールを読み解こうとした書物がある。村瀬学による『新しいキルケゴール』（大和書房、1986 年）がそれである。著者の村瀬は当時、心身障害児施設の職員をしていた。その意味で彼は“素人”であるが、現場で培った深い問題意識が彼にはあり、すでに『初期心的現象の世界』や『理解のおくれの本質』（いずれも大和書房）といった著書も出していた。そして何より、彼は高校時代からキルケゴールを読み込んでおり、彼の思想世界に魅せられてきたのだった。私は『新しいキルケゴール』が刊行されるとすぐに買って読み、その後も何度読み返したか分からない。

この本には、確かに“素人”なるがゆえの思い込みもなくはないし、書き方も“アカデミック”なものではない。ゼミの授業中、本書のことを話題にしたら、大谷先生も苦笑いをされていた（実は本書中に大谷愛人批判もあった）。しかし、それらの瑕疵を補ってあまりある魅力がこの本にある。これを書くことによって、最も裨益されたのは著者の村瀬自身ではなかっただろうか。そして、この本を読むことによって、どれほど多くの人々がキルケゴールを読み解く鍵を見つけ、かつ自らの生き方をより一層深めてくれるヒントを得たことだろうか。

我々はキルケゴールを読み、彼と対話することによって、我々自身をより深く知ることができる。それは我々自身の実存的な反復、すなわち受け取り直し^{ゲンテールセ}なのである。キルケゴールは自分のために読め。そして彼と心の対話をせよ。キルケゴールという思想家は、我々読者にも一人の自立した思想家であることを要求してやまないのである。